

鹿児島発クラシック音楽への挑戦

鹿児島放送 代表取締役社長 古山 順一



コロナ禍で遠ざかってしまったものの一つに音楽のライブコンサートがある。鹿児島のクラシック音楽シーンを牽引してきた鹿児島国際大学音楽科のウーヴェ・ハイルマン教授が指揮する合唱団とオーケストラの活動が完全にストップしてしまった。

2019年にはバッハの名曲「マタイ受難曲」を東京で公演し、耳の肥えたクラシックファンを唸らせた。この楽曲を学生やアマチュアを主体とする人々を指導して、しかもしっかりしたドイツ語で演奏できる音楽家は日本にはそういうないだろう。YouTubeでも配信されたその動画は本場ドイツでも好評だった。その感動を再び鹿児島で披露しようと企画した2020年2月末のコンサートは、感染症の全国的拡大を警戒する厳しい世論の中で断念せざるを得なかった。

ハイルマンさんとの出会いは数年前の県経済同友会の懇親会に遡る。会の冒頭で蝶々夫人などのソプラノ独唱を披露した女子学生を引率してきたのがハイルマンさんだった。食事が始まり、鹿児島スタイルで人々がテーブル間を移動して入り乱れる中、ポツンとテーブルに座っていたハイルマンさんに私は話しかけた。



指揮をするウーヴェ・ハイルマン氏
(鹿児島国際大のHPより)

15年以上前になるが、新聞社のベルリン駐在記者をしていましたこともあり、多少のドイツ語はわかる。ベルリンで通ったオペラのこと、鹿児島のことなど短い時間では話しきれず、「次はお茶でもご一緒に」ということになった。日本人なら社交辞令のこの言葉も、ドイツ人の場合は即実行だ。翌週、ハイルマンさんは自慢のハーレーに乗って一人で私のオフィスにやってきた。

ハイルマンさんはドイツ南西部ダルムシュタット出身で、著名な音楽家を輩出したデトモルト音大で学んだ。ドイツの戦後の音楽界を牽引したソプラノ歌手、エリザベート・シュワルツコップにも師事した。テノール歌手として1980年代から90年代にかけドイツのオペラ劇場だけでなくニューヨークのメトロポリタン歌劇場にも出演したほか、ロンドンの有名クラシックレーベルと専属契約し、「オペラ界の星」として活躍した。ベルリン・フィルの首席指揮者アバドほか著名な指揮者との

共演経験も豊富だ。ドイツで活躍していたソプラノ歌手中村智子さんと結婚し、彼女の故郷鹿児島にやってきた。

当初は鹿児島に4年制の音大がなかったため数年間、沖縄で教鞭を執った後、2000年に音楽科ができた鹿児島国際大に智子さんとともに教授として招かれた。情熱あふれる教授法は教え子たちの心を掴み、音楽界に羽ばたいていった。私とハイルマンさんの出会いのきっかけとなった女子学生、谷口まりやさんはその後、オーストリアの総合芸術大学、モーツアルティウム大に留学し、著名なソプラノ歌手のバーバラ・ボニー教授に師事した。2019年にはドイツ・ザクセン州立歌劇場の若手研究生としてソロ契約し、歌手としてスタートしている。

ハイルマンさんの鹿児島への想いは熱い。欧米の音楽界の第一線から退く直接のきっかけとなった喉の病は日本の医療、特に漢方治療によって完全に治った。奥さんと一緒に暮らす大隅の豊かな自然に癒やされたという。

ハイルマンさんの活動は鹿児島放送(KKB)の番組で紹介させていただいた。モーツアルトのオペラ「ドン・ジョバンニ」に情報番組のMCがゲスト出演したこともある。

2019年1月には鹿児島国際大大学院の教え子4人を連れてハイルマンさんはドイツを訪問した。KKBはディレクター1人を同行させ、本場の4つの音大に挑戦する若者たちの姿を夕方のニュース特集で紹介した。4音大の教授はいずれもハイルマンさんが欧州にいた時の友人で、音大の学部を任せられる立場になっている。ここで認められれば、欧州の音楽界への道も開ける。ハイルマンさんが直接交渉して実現した旅だった。そんなことができるのも、クラシック界の最前線で活躍していたハイルマンさんだからこそだ。

ハイルマンさん自らレンタカーを運転し、

デュッセルドルフ、ベルリン、ドレスデン、ザルツブルクを駆け抜けた冬の旅は、若者たちにとって本場の音楽の世界に繋がる夢の始まりだったに違いない。4人の学生はいずれも高い評価を得ていた。

ハイルマンさんのレッスンを受ける若者たちを見ていると、ハイルマンさんを通じて世界を見ているように感じる。ハートフルな教えを受けて一人一人が才能を大きく伸ばしているようだ。ハイルマンさん自身、「自分がかつてオペラの世界で活躍したのは、今、このアジアの片隅で、鹿児島で、若い人たちに音楽の心を伝えるためにあったのかもしれない」と語っている。

そんなハイルマンさんと何度も話しているうちに「鹿児島のために何かしよう」という彼の熱い言葉に感動を覚えた。

私自身は音楽が専門でもなく、ただ音楽を聴くのが好きだけだった。クラシック音楽を身近に感じるようになったのはドイツで生活してから。最初は2年間、ドイツ国際放送(ディチエ・ウェレ)に新聞社の語学留学で出向したときに、地元の西部ドイツ放送交響楽団の演奏会に通った。2回目は5年間のベルリン駐在の時。日本の新聞の朝刊縮め切り時間がドイツの夕方だったので、時間が出来ればコンサートやオペラを見に行つた。

ベルリンにはオペラ劇場が3つ、有名なオーケストラが4つあり、どれも聴き応えがある。そのほかにも教会や小ホールでコンサートがあり、しかもチケット代が安いとなれば行かないわけがない。学生はさらにその半額とあって気楽に行けるところが素晴らしい。堅苦しい理屈など抜きにして生で聴く素晴らしい演奏は私をすっかり音楽の虜にした。

ドイツはかつて小さな国が集まった領邦国家だった歴史的背景もあり、地方自治が進んでいる。文化教育行政は地方が担っており、

オーケストラの団員、所属歌手は各州の公務員だ。日本でドイツの「国立歌劇場」などと紹介されているものも多くは「州立」だ。音楽は「公」のもの、という意識がドイツの人たちには強い。日本語の「公」には「国の」「国家の」と言ったニュアンスを感じるが、ドイツで言う「公」には、国家も民間も地方自治体も含むもっと幅広い意味で地域の人々に支えられているという意味合いが強い。そういう意味での「公」に支えられたドイツの音楽のようなものが目指せないか。ハイルマンさんと話しているうちにそんな思いが私の中にも強くなっていた。

何度も話し合った末、ハイルマンさんが培ってきた合唱団とオーケストラを鹿児島放送が全面支援する共同事業としてスタートすることになった。2020年度中に始める予定だったが、コロナ禍で遅れている。万全の感染症対策を施した上で、21年3月には「マタイ受難曲」の公演を実現したいと思っている。新年度からは広く合唱団員を公募して県民合唱団・オーケストラとして年に3、4回のコンサート開催を計画している。

クラシック音楽と言えば敷居が高いと感じる人が多いかもしれない。日本では東京や大阪といった大都市のもので、地方都市の音楽レベルは低いとさえ言う人もいる。鹿児島はそういう意味でクラシック音楽の後進県と思っている人もいるだろう。

でも、今でこそクラシック音楽が盛んなドイツもかつてはイタリアなどに遅れをとり、ヨーロッパの音楽後進地だった。

宗教改革を経て教会音楽がドイツ語になり、宮廷音楽からハンザ商人らに支えられた都市文化の一つとして音楽が市民の間に育ち、発展していった。バッハが登場し、ベートーベン時代に大きく花開いた。音楽はそこにどれほど愛する人がいて、どう育てるかが重要な

のではないか。ハイルマンさんが鹿児島で培ってきた音楽を聴いているとそんな思いが強くなる。

鹿児島に「オペラ界の星」ハイルマンさんが舞い降りていることをきっかけに人々の心に灯がともり、鹿児島からクラシック音楽が花開いていく。そんな可能性は大いにある。

KKBとの共同事業となる最初のコンサートが開かれる3月21日は欧洲の旧暦で音楽の父ヨハン・セバスチャン・バッハの誕生日だ。そのバッハの傑作の一つとされるマタイ受難曲は、キリストの受難、死を描く長大なものがたりだ。キリストの再生をも予感させる歌声を聴いたら多くの人の心を揺さぶるに違いない。このコロナ禍からの再生を目指す人々の祈りを込めて鹿児島から発信できたら、と思う。音楽を愛し、鹿児島を愛する人々の願いを込めて。多くの人々のご支援を賜れば幸いである。